

南支潮州・汕頭地区の戦い

森田舟艇工兵隊

佐賀県 森田徳郎

大正十年三月四日、佐賀県藤津郡能古見村大字三河内乙三九一で七人兄弟の長男として生まれた。佐賀師範学校を昭和十六年三月卒業し、教師をしていたが、十六年徴集兵としての検査では甲種合格であった。徴兵官は「海軍へ行け」と言われたが「海軍はすかんです」と言うと、徴兵官は笑っていたが、私は陸軍へ行くこととなった。もし海軍へ行ったら、あるいは私の人生の分かれ目となったかもしれない。

昭和十七年二月十日、小倉の歩兵百二十三連隊留守隊へ入営したが、その時既に独立歩兵第九十九大隊要員となっていた。渡されたものが一月なのに夏服であった。これは南方だと思った。それに我々要員のみが連隊の一般の兵隊とは違って、別の兵舎の班で、古兵

はおらず我々を幸領に来ていた下士官と初年兵だけであつた。

三月二十三日に門司を出航したのだから、四十日間ほど小倉で初年兵の基本のみの訓練がなされていた。

出発時の軍装検査をした連隊副官の市川少佐が、実は独歩第九十九大隊の部隊長となられたという縁があつた。勿論出発の時は我々は分からなかつた。門司から一隻だけの航行だったように記憶しているし、護衛艦も無かつたと思う。開戦から四カ月で日本が押し気味で、制空権は日本にあつたからでしょう。

目的地南支の汕頭地区には三月二十八日に着いて、部隊は澄海県澄海にあり、その警備をする第一中隊に配属された。この部隊は台湾軍の隷下で海南島から雷州半島攻略に参加した強い部隊だった。各隊はそれぞれ要所に分哨を出していて、部隊本部との連絡は船だった。初年兵教育中に大隊本部で試験をし、一個大隊で二十人くらいで中隊ではトップだった。兵科幹部候補生に採用され、十月二十六日まで潮州汕頭地区の警備をしていたが、土匪はいが治安は良かったよう

だった。分哨勤務中に命令が出て久留米第一陸軍予備士官学校へ分遣のため汕頭港を出発した。船が遅れ、基隆から汽車で高雄經由で学校に着いたのは十一月十七日であった。

学校の訓練は厳しいものだった。第一線小隊長としての教育であるから当然だったが、昭和十八年四月、第八期生として卒業し、曹長に任官、見習士官となる。五月二十四日、門司港発、三十一日香港着、六月十七日汕頭着である。香港から汕頭まで日数がかかったから、旅団司令部へ行った。ところが、予備士官学校の中村校長が、我々の潮兵団（独混第十九旅団）の兵団長でした。

旅団長は「香港で遊び過ぎているから、たるんでいる」と、小銃と軍刀を持って作戦に配属されて戦闘をしました。私の部隊は不参加だったが、同期の中には戦死した者がいる。実戦未経験で真面目にやったから、軍刀と小銃と両方持って戦ったわけである。この中隊は兵団長から見習士官を使えと、斬込隊に使った。私の小松部隊長は見習士官を使う予定だったが使わなかつ

たので私は助かった。これは潮州の方の作戦で、羊蟹作戦という。北の方へ上がって行った。以前の潮汕鉄道に沿っての旅団の作戦だった。

これは、中隊の守備隊が敵襲を受けて、連絡をとるので撤退してきた。ところがこの守備隊は全滅ということになっていたらしいので、その三名くらいの兵隊は、陣地放棄したととられて結局自決したのである。全滅だから生きてはいけないうのが当時の軍隊であつたわけでしょう。ノモンハン事件の時も、将校が自決させられている。

今申した旅団作戦は、天河、白雲の飛行場から陸軍航空隊の戦闘機「隼」が来て、敵を機銃掃射しての戦いでした。六月十四日から三十日までで、終了後、汕頭に戻った。そして潮汕地区の警備をした。六月ころは果実の荔枝わかしがうまかった。唐の玄宗皇帝の楊貴妃が、南支から長安まで運ばせたという言い伝えがあるぐらいおいしい果実でした。

九月二十三日、第三中隊付きとなり、続いて第一中隊付きを命ぜられた。私の第一中隊は蟠龍山の山の上

の警備をしていたが、その時の大隊本部は蕘垣だった。山は岩山だった。九月三十日、私は単身で第三中隊から桑浦山を越えて第一中隊に到着した。

仲秋作戦は昭和十八年九月十一日から十七日であるという。工兵隊の徳田氏の南支回顧録によると、その戦況の概要は次のごとくであり、生と死の切迫した状況を知らることができる。

一、敵は独立二十旅団に代わり甲装備の一八六師（韶関―余漢謀揮下）である。

一、一時敵は我が方の第一線を突破し汕潮公路を寸断したが我が友軍の強烈な反攻により後退す

一、現在我が方の第一線陣地確保のため猛反撃展開中で増援のための坂本部隊派遣

一、我が軍は敵の危機状態から今は脱出した状況だが留守隊も充分警戒すること

以上が十三日、副官部からの現況発表である。

また、捕えた敵兵の尋問は下級兵のため全面的に信用できないが概ね次の事項が判明。

一、本日攻撃したのは全部一八六師である

一、羊鉄嶺、一五一高地、厚婆拗。各陣地にそれぞれ一個宮（大隊）、一個団（連隊）を以て攻撃主力として潮州方面に進出のこと

一、日本各陣地を攻撃占領、仲秋の名月は潮州城内にて迎えること

一、本日夜明けと共に友軍飛行機の応援あり、これに乗じて更に攻撃進出のこと

これによるごとく、四囲は敵の重囲に落ち入って連絡とれず吉田隊以外の各陣地は全く不明ということで兵団司令部は西川部隊長に応援を命じた。

各隊が包囲され小松部隊が釘付け状態の十三日、正午、厚婆拗にいるはずの陣地長○○曹長以下二十名が、長美小哨跡の教育隊に退いてきた。彼らは直ちに部隊長に呼ばれ「お前たちは陣地を放棄するとは何たることか、ただ今から敵地に乗り込み死んでこい」ようやく敵中を突破生還した彼らにとり部隊長の言葉は無情であった。

（注）第一線陣地守備の小哨は各中隊ごとに配置され、その任務は中隊の命であり、部隊の一翼を支え

る些であるために小哨規則は「……一兵に至るまで死守すべし」と義務づけられていた。この規則に反すれば軍法会議に付され逃亡と同様「死刑」とされている。

○曹長の取った行動は理出のいかんにせよ正当な行為でなく、部隊長から報告を受けた兵団長閣下の激怒もさることながら「死ぬ」と言う言葉の中には他人の理解し得ない温情が含まれていた。

中村旅団長閣下が陣地に見え、明朝より敵に対し攻撃をとることである。敵にこれだけ叩かれて黙って引込むのは我慢ができないということである。増援の坂本部隊と共に三〇九高地陣地を攻撃し麻石嶺まで進撃することとなった。二池中隊長は中隊の名譽を挽回するため、敢えて兵団長に進言し「三〇九高地を攻撃するならば、私の中隊独自で攻撃させてください」と、兵団長は快く承知された。

十三日払暁、本田隊と配属部隊は厚婆嶺を占領した。十五日、三〇九高地攻撃には、大隊本部の要請で「○曹長以下小哨勤務者だけで一個小隊として使用し、

三〇九高地攻撃に際しては一番危険な箇所を攻撃させる」と、本部の言葉は有無を言わせぬものであった。

九月十五日昼間、兵団長閣下以下各隊長集合、攻撃命令が下達され「兵団は本夕刻より行動開始敵前至近距離に肉迫、払暁時軍直協機の協力を得て、この対地攻撃に膚接し一斉に前面各陣地に突入、三〇九高地麻石嶺の線に進出、これを確保する。小松部隊左、坂本部隊右第一線で、兵団砲・工兵隊は各自それぞれ協力する」。

打ち合わせが終わると、兵団長閣下は今回我が部隊各隊の戦闘処置と兵の志気弛緩を厳しく叱責した。

温厚な部隊長は前作戦に多くの部下を失い、今回も既に多数の犠牲者を出している身であれば一言もなく頭をたれたままである。この時一步進み出た吉田中隊長は語気鋭く「自分らの処置拙劣は不徳の致すところ申し訳ないけれども、一部の兵の行動（陣地放棄）をもって全体の卑怯呼ばわりされるのは納得できません。その兵たちは今死を賭して戦っているのです。その兵まで批判されるのは全く不穩当極まりないお言葉です。

撤回してください」兵団長閣下は人一倍感情の激しい人でした。「よしワカッタ」下級将校が一軍の長である旅団長に対してこのような言動は許されるものでなかったが、今まで何回となく遂行し得なかった三〇九大背嶺攻撃に、果たしてこの内から何人人生還できることか、と思われたと思う。

攻撃目標、種田第一中隊が大背嶺、吉田第三、三池第四中隊が三〇九高地。決戦を求めて凄壮な夜襲戦は決行され、物凄い銃声爆音が下火になったころ、三〇九高地に「赤吊屋」が空中に上がり、突撃成功、完全占領で、本部から歓声が上がった。

第一中隊の大背嶺攻撃は、急斜面中程まで達したとき、敵が発見、谷底目掛け発砲した。小銃・機銃・手榴弾の爆発音が連続し谷間はたちまち修羅場と化し、上の敵も五十名くらい、火器も相当持っていると思われる。猛射を浴びせられているうち攻撃隊は一カ所に集まってしまい、登るのを中止した。「おーい、どうしようか上の敵、あまり多かござるぜ、引っ返えそうか」「分隊長、降りて行ってもこれじゃ戦死バイ。

それより生き残ったところで命令違反で銃殺デスタイ、どうせ死ぬなら潔きヨー上の敵に突っ込んで華々しくやりまっしょうや。突撃して一線でも二線でも確保すりゃ、そのうち応援部隊が来よるかもしれませんバイ。分隊長はこれに同意、各自手榴弾を一、二、三で投げ八名一丸となり喚声を上げながら突撃したが、あまりにも急斜面にやっと突入できた有様である。

第一中隊本部は黎明時、直協機の爆撃に膚接し、攻撃占領命令に従い突撃発起点に向かい隠密前進したが、発見された場所も悪く、正面、両側面の火器、手榴弾の猛撃の標的になる。大苦戦で犠牲は増えるばかり、嶺中尉、岩下准尉、尾関見習士官、分隊長も倒れてしまった。種田中隊長も重傷後退し、中隊主力は重機関銃小隊を除きついに幻の突撃隊となる。

しかし、兵団の作戦は成功、坂本部隊も所期の目標まで進出した。敵は一斉に後退を続けているが、大背嶺の第一中隊正面は依然として銃声、手榴弾の炸裂音が続く。好機を失って動かないのは変だと言っているうち、一人、二人の人影がノロノロ山頂を目指して動

き出す。「それっ」と言うので工兵隊を主力にして一斉に大背嶺攻撃に向かった。

十六日昼近く掃蕩を終わり、兵団司令部も三〇九高地に進出、その後は戦場掃除、死体收容が大変である。負傷者も担架で後送するが到底兵力では間に合わず苦力を動員、警備兵以下は全員これに当たり、鹵獲兵器の整理もまた大変な作業となる。

このように、極めて厳しい状況の中で、兵団長も、部隊長も中隊長も部下に対し厳しい処置をしなければならず、これが軍隊、軍紀である。「死守せよ」と命ぜられれば、死んでも、全滅しても命令は守らなければならぬのであり。南支の中で孤立している部隊は、このようにして、強力な敵を撃退することができた。これはそれを実証する記録である。

私は十八年十二月一日少尉に任官した。

潮汕地区は一個旅団で警備していたが、昭和十九年になると、春から大陸打通作戦で北支から中支への京漢線打通の河南作戦が発起することとなるので、支那派遣軍は北から南までその準備中で、南支軍でも二個

歩兵旅団の編制が行われていました。南支軍の兵力は、大東亜戦後は、第一〇四師団（鳳兵団）と、独立混成第二二旅団（節兵団）の広東を中心として東西南北を守備し、我々の第十九旅団（潮兵団）は、東方の離れた潮州・汕頭地区の海豊・陸豊という海岸沿線に布陣していた。

蒋介石軍は、日本の一個師団、二個旅団を包囲した形で布陣していたので、少しでも手薄になれば攻勢をかけることができる態勢であったのです。しかし、南支方面の中国軍は、敢えて事を構えて積極攻勢には出ていなかった。

南支からは主力の鳳・節兵団が出勤することになるのだが、海南島、雷州半島の独混第二三旅団（純兵団）もこれに呼応して出勤となるのである。結局、南支軍の固めの中心部隊は、昭和十三年のバイヤス湾敵前上陸した古參の伝説ある我が第十九旅団ということになってきていた。

私が任官した翌年は先制防御の積極的戦略をとることになるのである。そのため、南支軍主力が作戦発起

するまでの第一期湘桂作戦対応の警備、中支軍と呼称して出撃する第二期作戦、特に第二期作戦は大作戦であるし、南支軍も第一〇四師団は遠く広西省、柳州攻略に、中支軍から転属して来た第二十二師団(原兵団)は昭和二十年一月には仏印までの打通をしたのですから、昭和十九年の南支の留守を守る我々の兵団は大きな任務を遂行しなければならなかったわけでありました。

南支軍には、出動した主力の穴を埋めるため、第一〇四師団の警備地には、肝兵団、独混第二十二旅団の地域は主として直兵団がこれに当たったわけです。我々の潮兵団は、南支軍の中核的な古参兵団となっていた。十一月、湘桂作戦の目的である広西省の桂林・柳州・南寧は我が軍によって占領され、年末には第三十七師団と第二十二師団は仏印まで進出し、作戦の目的が達せられ、第一〇四師団(鳳)は広東省地域に帰還した。

その間に、昭和十九年十二月五日から二十五日まで、「十九暮掲陽勦定戦」があり、我が兵団は汕頭―菴埠―楓津―錫揚―湯坑―洪陽―梅花―潮陽―汕頭へと帰っ

た。

我々の部隊は主力となり攻めて行った。兵団長は積極的で、押せ押せだから案外損害は少なかったと思う。米軍の来襲に対するため海岸線の防備のため陣地構築していたが、グラマン機の空襲がバリバリと来る。我が第九十九大隊は陣地を構築していた。

昭和二十年一月二十三日から二十七日まで「二十冬掲普恵勦定作戦」があり我々はこれに参加し海岸へ出て(庵埠から)行って戦線を拡大した。このころには中村兵団長から近藤兵団長に代わっていた。この作戦後、独歩九十七大隊は普寧へ(潮陽から)、我が第九十九大隊は庵埠から恵来へ、第百大隊は潮州から掲陽へとそれぞれ進出した。これにより南支軍は汕頭―香港間の戦備を重点的に行った。その間、一月八日ごろ、食料確保のための作戦もし、だんだんと状況は悪化しつつあった。

三月から五月、粵東地区の整備であるが、四月十二日、第百三十師団の臨時編制が発令され、独立混成第十九師団を中心に、二月に到着した波潮部隊、波雷部

隊の一部を加えて師団編制され、今までの兵員に九州、四国、中国、東北の部隊員が加わり、師団の新兵力は一万五千人くらいになったと思う。

その編成及び主要職員は次である。

第三百十師団長	陸軍中將	近藤	新八			
歩兵第九十三旅団長	少將	針谷	逸郎			
独立歩兵第九十七大隊	大尉	三宮	善人			
〃	第九十九大隊	大尉	中原	實		
〃	第二七七大隊	少佐	宮脇喜平次			
歩兵第九十四旅団長	少將	小野	修			
第三百十師団	汕頭支隊、					
第三百十師団	砲兵隊、	工兵隊、	通信隊、	第一・第二野戦病院、	病馬廠、	防疫給水部

昭和二十年五月五日 軍令陸甲第六五号に依り第一三〇師団工兵隊編成下令

同年五月八日 移駐のため陸路汕頭へ出発

同年五月二十日 第一三〇師団工兵隊編成完結し、第三中隊付となる。

同年五月二十日 広東省新会県裡村着

私は工兵隊本部付となり、第三百十師団司令部は海上輸送を円滑にするため工兵隊に舟艇小隊の編成を命ぜられた。クリークの多いこの地帯にはトラックの輸送より船による輸送の方が効果が大きいと判断されたためであった。工兵隊長は直ちに小隊を編成することとなり、私は舟艇隊長を命ぜられ、隊員は私のほか六十五名であった。

陸地のトラックに代わる海上輸送は大変忙しいもので、武器・弾薬を始め、食糧・兵員の輸送と日夜を問わず活躍していた。潮州・汕頭地区から転進して来たばかりの兵隊には地形を調べている暇がないので船は次々に簡単な地図を片手に出発していった。ある時は敵機の来襲を避けたり、敵中を突破し任務を遂行したのである。

広東南部地区を四方に広がるクリーク、いわゆるデルタ地帯を我が森田工兵舟艇隊の活動は大変なものであった。舟艇はヤンマーや焼玉エンジンまで、メタル

が焼けると、技術者でもある小形隊長が自ら作られたりされた。隊員は船頭なども含めた工兵隊員で、その後、余暇には、「ペーロン競争」などもして、兵の士気を高揚させたり、気持ちを取りラックスさせたこともあった。また、その功績が認められ次のごとく賞状を付与され、兵の労に報いることができた。

『表彰状』

第三百十師団工兵隊付

陸軍中尉 森田徳郎

外六十五名

右者昭和二十年六月師団ノ広東南方ニ移駐スルヤ工兵舟艇小隊ト為リ老朽不完全ナル舟艇ヲ巧ニ修理活用シ敵機、跳梁兵匪ノ蠢動活発ナルニモ拘ラス昼夜ヲ別タス寢食ヲ忘レテ克ク錯雜不明ノ水路ヲ開拓シ対米戦備強化「ウ」号作戦等ニ伴フ各種輸送ノ任ヲ完ウシ尋テ八月中旬事態急変後ニ於テモ愈々志氣ヲ昂揚シ団結ヲ強固ニシ各種困難ナル輸送ヲ遂行シ以テ師団ノ兵力移動及自活態勢ニ貢献スル所是ニ大ナリ

是レ小隊長森田中尉ノ卓越セル指揮ト熾烈ナル責任

観念並ニ舟艇隊員ノ強固ナル団結ト旺盛ナル志氣トニ
依ルモノニシテ以テ衆ノ模範トスルニ足ル

仍テ茲ニ表彰ス

昭和二十年十月二十四日

第三百十師団長陸軍中将從四位勲二等

近藤新八

さらに引き続き広東付近の警備にも任じていた。終戦後も舟艇を持っていたので、部隊の移動や、師団長の巡視などの任務に就いていた。工兵隊の抑留は、広東省順德県の具庁所在地の大良集中営である。広東地域での我が軍の戦力は中国国府軍より圧倒的に優勢であった。また、我々は中国軍に戦犯のため逮捕された近藤師団長に心を残しながら、各部隊は内地へと復員船リバティーに乗り帰国したのである。

今永副官が、その旨を師団長に報告すると「よかったです、これでもいい死ぬる」と涙を流して喜ばれたという。

師団長近藤新八中将は昭和二十二年十月三十日午前

十一時、広東において処刑された。

【解説】

南支第二十三軍、軍直戦闘部隊、主要兵団の編成次のごとし。

第二十三軍司令部（波第八一一一）

○軍直戦闘部隊

独立混成第三十一連隊、独立野砲兵第七大隊、

野戦高射砲第五十五・第九十九大隊、

野戦機関砲第四十九中隊、独立工兵第五十九中隊、

特設工兵第八・第九中隊

○第一〇四師団 司令部（鳳第八九七四）

歩兵第一〇八、第一三七、第一六一連隊、

野砲兵第一〇四連隊、工兵第一〇四連隊、

輜重兵第一〇四連隊、第一〇四師団通信隊、

同野戦病院、同兵器勤務隊、同病馬廠、同衛生隊

○第一二九師団 司令部（振武第八六四一）

歩兵第九十一旅団司令部、独立歩兵第九十八大隊、

同第二七八大隊、同第二七九大隊、同第二八〇大隊、

歩兵第九十二旅団司令部、独立歩兵第一〇一大隊、

同第五八八大隊、同第五八九大隊、同第五九〇大隊、

第一二九師団砲兵隊、同工兵隊、同通信隊、

同輜重隊、同兵器勤務隊、同野戦病院、同病馬廠、

同防疫給水部

○第一三〇師団 司令部（鐘馗第八六六一）

歩兵第九十三旅団司令部、独立歩兵第九十七大隊、

同第九十九大隊、同第一〇〇大隊、同第七七大隊、

歩兵第九十四旅団司令部、独立歩兵第二八一大隊、

同第六二〇大隊、同第六二一大隊、同第六二二大隊、

第一三〇師団砲兵隊、同工兵隊、同通信隊、

同輜重隊、同兵器勤務隊、同第一野戦病院、

同第二野戦病院、同病馬廠、同防疫給水部

○独立混成第二十三旅団 司令部（純第九八四一）

独立歩兵第七十大隊（独混第二十二旅団）、

同第一二八大隊、同第一二九大隊、同第三〇大隊、

同第二四七大隊、同第二四八大隊、旅団砲兵隊、

同工兵隊、同通信隊

○独立歩兵第八旅団 司令部（肝第八一三八）

独立歩兵第二二九大隊、同第二二〇大隊、

同第二二一大隊、同第二二二大隊、旅団通信隊

○独立歩兵第十三旅団 司令部（直第八一四〇）

独立歩兵第二三九大隊、同第二四〇大隊、

同第二四一大隊、同第二四二大隊、旅団通信隊

○香港防衛隊 司令部（香第八一三八）

独立歩兵第六十七大隊、同第六十八大隊、

同第六十九大隊、香港防衛砲兵隊、香港憲兵隊、

独立山砲兵第五十一大隊、独立自動車第三十一大隊、

同第三十二大隊、同第三十三大隊、

○第二船舶輸送司令部（暁第二九四一）

船舶通信第二大隊、第六野戦船舶廠、

船舶工兵第二十九連隊、同第三十三連隊、

同第三十四連隊、

* 独立混成第十九旅団（潮）略歴（第一三〇師団前身）

昭和十五年十二月五日、軍令陸甲第五十八号により

編成下令。

同年十二月二十五日、独立混成第十九旅団編成完了

昭和十四年六月二十二日、第一〇四師団主力部隊、

第一三二旅団により汕頭占領、六月二十四日、達

濠島、潮州占領

旅団はパイアス灣敵前上陸部隊と青島駐屯部隊により編成さる。

旅団長 初代 遠藤 春山少将

二代 松井 貫一少将

三代 中村次喜蔵少将

四代 近藤 新八少将

撃墜七十七機

香川県 井原 九八

大東亜戦争中の昭和十九年三月、現役兵として広島

西部四部隊に入営しました。私は農家の次男として育ちましたが、長兄は昭和十四年中支戦線で県城攻撃の際、一番乗りの偉勲を立て、名誉の戦死を遂げています。